

夢であってほしい(1995 年 4 月号掲載・谷内 康雄)



現場マンションの一室で“それ”は突然襲ってきた。体が横にゆすぶられる。その後激しく何度も下から突き上げられバランスが保てない。部屋の電気は消え、食器棚は倒れ散乱、ペンライトの明りを頼りに、傷病者を伴い外へ出る。

辺りは暗闇でガスの臭いが漂う。道路は倒れた壁へ柱等で救急車の進路を阻む。国道 43 号線まで出ると阪神高速が横倒しになり、巨大な壁と変貌、言い様の無い不気味さを感じる。途中何度も住民に呼び止められるが、他への連絡もできず、傷病者搬送を重視する。

普段の倍以上の時間をかけ、やっとの思いで東神戸病院へ辿り着くが、すでに人が溢れかえり下車と同時に数人に取り囲まれる。搬入を断念、とりあえず 3 人別々に応急処置に駆け回る。

「娘を助けて！」と母親が3歳ぐらいの女の子を抱いている。すでにDOA(Dead On Arrival: 病院到着時、心肺停止しているもの)、状態が悪い。CPR(心肺蘇生)をしながら事情を聴取、地震の際、危ないと思い覆いかぶさった上に家財が倒れ、抜け出せなくなったとのこと。

「助けて下さい」と何度も何度も私に手をあわせる。数分経つ。駆けつけた医師により死の告知。

「私が殺した」と母親が号泣、「くそーくそー」と父親が叫ぶ。胸が傷む。目頭が熱くなる。この様に、あまりにも唐突の別れに落胆する家族があちこちに見受けられる。夢ではないか、いや夢であつてほしいと願う。

覚知より約3時間後、甲南病院へ最初の救急搬送を終える。この間、あまりにも多くの、人の死、別れ、涙、絶望、また怒りを目の当たりにし、この現実離れした真実を受け入れるのには、短すぎる時間であったが、私の心の中には長くつらい時間が残るであろう。

帰署途上、すこし放心状態の中、もし現場が木造家屋なら、また43号線を通るタイミングがと考えるが、現実でないこの思いが、大変無意味に感じられた。